28．肺空洞性陰影の診断

田宮敬久，朝岡威親，今野暁男
（千葉労災・外科）

昨年，空洞性陰影を呈した肺癌症例を報告したが，今回は，同様の陰影を呈した肺化膿症の1例を報告した。胸部X-Pのみからでは，両者の鑑別は不可能で，又，気管支鏡，経皮的吸引細胞診等でも，本症例は確定診断を得られなかったが，その経過より肺化膿症と診断した。諸検査の偽陰性が必ずしも少くないので，今後，慎重な経過観察が必要である。

29．当院における心外膜炎の臨床的検討

鈴木俊英，喜屋武邦雄，戸島洋一，松島保久，
大島仁士　（松戸市立・内科）

当院の過去3年間における，大量に心膜液貯留をきたした心外膜炎6例（腫瘍性3例・膠原病に伴うもの2例・特発性1例）について検討した。症状は咳嗽・呼吸困難・発熱・胸痛が主であった。胸部X線所見及び心電図所見は，非定型的なものも多く診断は難しい。UCGが重要である。予後は，腫瘍性のものでも，心膜腔drainage・抗癌剤局注等により延命効果が認められた。膠原病に伴うものはsteroid治療のみで軽快した。

30．気管支結核の臨床像と外科治療

小　山　　明（結核研究所附属病院外科）

内視鏡の進歩に伴い活動期の気管支結核を発見することが多くなった。一般に咳嗽，喀痰，喘鳴等の症状が強く，胸部X線所見は浸潤影～無気肺を呈し，咳痰中結核菌検査により診断可能である。治療は化学療法が中心であるが，気管支内腔が瘢痕性に狭窄～閉塞し，末梢に二次肺炎や無気肺をくりかえす場合には手術適応となる。主気管支狭塞の場合，末梢肺の状態によっては気管支形成術が肺機能温存のため望ましい術式である。

31．正常肺機能の検討

鈴木淳史，白幡真知子，伊東和人（国立千葉）
黒野　隆，翼浩一郎　（千大・肺内）

心肺疾患を認めない男性280例，女性298例，計578例を対象として，肺活量，一秒量を測定し，検討した。日本人の体格の変化に合った，%肺活量の正常予測値の設定及び，年齢変化に見合う一秒率の正常予測値の設定する必要性を認めた。

32．カンチェンジュンガ峰登山隊員における換気応答の検討

増　山　　茂（千大・肺内）
木　村　　弘（国立千葉東）

8598m 峰を目指す日本山岳会隊隊員に対し，登山前及び登山後に高炭酸ガス換気応答（HCVR）低酸素換気応答（HVR）を行った。①High performauce climbers は Low performance climbers より HVR において高値を示した。HVR は平地における隊員の評価選択に有効であると示唆された。②登山前に比し，下山後は赤血球数の増加 $PaCO_2$ の低下と共に，HVR は有意に低下し，順化の呼吸調節に与える影響に一知見を加えた。

33．非小細胞癌に対する CDDP を中心とした化学療法

篠崎俊秀，金井太美子，山本　弘，井村价雄，
鈴木　光　（都立府中・呼吸器科）

非小細胞癌13例に対し，CDDP 単独連日投与（I法），及び MMC or ADR との併用療法（II法）を施行した。抗腫瘍効果は，Sq で$^{4}/_{6}$例（67%），Ad で$^{2}/_{6}$例（33%），La で$^{0}/_{1}$例（0%）であった。副作用は，主に嘔気嘔吐，神経障害がみられたが，副作用上脱落例は$^{1}/_{25}$例であった。

34．ヒト肺癌の産生する免疫抑制因子についての検討

安田真一，嶋田晃一郎，堀江昌平（獨協医大）

ヒト肺癌細胞の産生する物質の免疫応答におよぼす効果について検討した。腫瘍細胞培養上清は50%濃度でリンパ球幼若化反応を約86%抑制した。この抑制は単なる^{3}H-サイミジンの取り込みの抑制ばかりかブラスト細胞の出現も抑制した。この物質の分子量はセファデックスによる分画ではウシ血清アルブミンと同様のところに溶出することより，約7万である。また pH 3に感受性を示した。レクチンによるアフィニテークロマトで N-アセチル・グルコサシンにより溶出した。

この因子はその活性発現に当っては抑制性細胞を誘導することでなく，リンパ球細胞表面に付着することでIL-2産生を抑制することであろうと思われた。また，この細胞への付着は細胞を洗浄することで除くことができた。